翻　　訳

フランス義務教育課程第４学習期の学習指導要領（フランス語）*

飯　田　伸　二

以下に読まれる文章は，2018年７月26日付『フランス国民教育省官報』第30号に公布され，同年新学期より施行されている「第４学習期学習指導要領」のフランス語に関連する箇所である[1]。具体的には，第４学習期全体のあり方を規定する第１部，第２部の全文，および第４学習期のフランス語教育にかかわる第３部「科目教育」の「フランス語」の全文である。第１部，第２部からは，義務教育課程，とりわけ中等教育第２～４学年（コレージュ２～４年）のあり方に対するフランス文部行政の問題意識を検証・考察するうえで重要な情報・知見が得られることが期待できよう。第４学習期３年間のフランス語教育の詳細については第３部を参照願いたい。

《翻訳》

第４学習期

第１部：深化学習期固有の特徴（第４学習期）

第３学習期の就学期間はコレージュ第１学年で完了した。生徒たちは次第に授業の新しい進め方と新しいリズムに慣れてきた。また，生徒たちは新しい生活の枠組を理解し，その規則を把握した。そして，その中で過ごすことに慣れてきた。生徒はいろいろな科目で技能（コンピテンシー）を伸ばし続けている。定期的に，かつ各学習期の終わりに評価されるこれらの技能（コンピテンシー）により，生徒は個人として成熟し，勉学を継続し，生涯にわたり学び続ける〔＝知識・技術の習得を続ける〕ことができる。同じく，社会に溶け込み，市民としてその発展に参加できる。学習指導・教育チーム全体がこれらの技能（コンピテンシー）の育成に寄与する。

第４学習期を特徴づけるアウトラインを明らかにするために，いくつかの側面を強調できる。これらは，すでに以前の学年にも見受けられたが，第４学習期ほど顕著でなければ，体系的でもなかった。

・　第４学習期にあたるコレージュの３年間，生徒は身も心も発達真っ盛りの青少年である。体育・スポーツ活動，文化行事の企画・実施に積極的に参加することは，これら若者たちが実践の喜びの中で調和のとれた成長を遂げることを促す。生徒は，より複雑なタスクに取り組むことによって自身の技能（コンピテンシー）を伸ばす。用いるのが知識にせよ，ノウハウにせよ，態度にせよ，これら複雑なタスク

キーワード：フランス義務教育課程，国語，フランス語，学習指導要領，文学遺産

* 本稿は2018年度科学研究費助成事業（研究種目：基盤研究Ｃ；研究代表者：飯田伸二；課題番号：18K02600；研究課題：フランスにおけるコレージュ改革の射程と実効性：国語教育の再編を中心に）の研究成果の一部である。

[1] 今回，翻訳に使用したテクストは，『フランス国民教育省官報』のサイトからダウンロード可能である。《https://www.education.gouv.fr/bo/18/Hebdo/MENE1820169A.htm》(accédé le 21 août 2020).

で求められるのはよりいっそう考えることである。問題を解決し，計画を成功に導くために，何らかの選択をし，適切な方法をとりいれることが求められる。これは**科目ごとの活動および科目横断活動**を通じて行われる。この種の教育活動では，全教員が成功の保証人となり，推進的な役割を果たす。生徒が手探りし，試行錯誤し，再びやり直すという考え方を受け入れるには，**信頼の雰囲気**の醸成が不可欠である。その中でこそ，生徒は恐れることなしに問いかけることができる。うまくいかないことへの恐怖が消えるからである。

・　この同じ展望のもと，生徒は，フランス語，現用語，身体表現あるいは芸術表現，科学言語（ランガージュ），今日の社会が提供する手段（イメージ，音，デジタル媒体等）を用い，**ある言語（ランガージュ）から別の言語（ランガージュ）へ移行**し，状況に適合した言語（ランガージュ）を選べるようになる。生徒が理解し，あるいは産み出さなければならない文章（テクスト）と資料はさまざまな言語（ランガージュ）の組み合わせである。ここでも，科目横断性がこの柔軟性と適合性を育成する。ただし，科目横断性が混乱の源ではなく，さまざまな視点の交換と比較照合の源になるという，条件が必要である。

・　生徒は，**情報があふれる社会**において，自身の権利と義務を自覚し，デジタル空間におけるアイデンティティーに熟知した，メディアおよびインターネットの利用者になることを学ぶ。また，常に変化するメディア・資料の世界に関する深い知識を通じて，批判精神を発揮しながら，情報源を識別し，評価することを学ぶ。生徒は自身で効果的に情報探索ができるツールを使用する。自身が生活する社会をよりよく理解するには，生徒自身が歴史という長い時間に深く関わることが不可欠である。生徒はこうして**知識の歴史的側面**と同じく，現代社会の技術，社会生活，環境に関わる難問に向き合うことができる。生徒にとって重要なのは，市民として責任ある行動をとることであり，さらに将来はより広い観点から行動すべく，自身を取り巻く世界を理解することである。

・　第４学習期以降，**抽象化とモデル化**はいっそう存在感を増す。だがこれは，抽象化・モデル化に至るために具体性という経路を探ることを妨げるものではない。これは全科目に関わることである。狙いは個人的な事例を越え，多様な状況に効果的に対応できるモデル化のツールを使いこなせる生徒の養成である。

・　同じくあらゆる学習期を横断する生徒の**創造性**は第４学習期では非常に多彩な媒体（特に科学技術媒体・デジタル媒体），取り組み，あるいは活動を通じ発揮される。すなわち，グループ作業，プロジェクトという方法，問題解決型授業，個人作品の構想等である。個々の生徒は，意欲向上につながる評価の高い成果をあげるため，オリジナリティある解決法を提案し，自身の知識と技能（コンピテンシー）を動員するよう励まされる。

・　学校内の生活，およびその原則を学外でも継続することは，個々の責任感と積極的参加の精神，および他者との協力心を養う機会である。学校教育上好適な雰囲気は，自身の自律性と自分自身で考える能力を高める上で最良の条件を生徒に提供する。道徳・市民教育を通じ生徒は，答えは複雑であるものの，私たちの民主主義社会の基礎となる本質的価値のある問いに対して，より深く考えるよう導かれる。

・　この学習期全体を通じ，生徒は以下のことを組み合わせるように指導される。すなわち，共通の文化の一環をなす規則を守ること，そして他方，自身の考えを構築すること，そして他者，多様性，発見に関心を向けながら，自身に固有の才能，目的意識を育てることである。

第２部

各授業科目からの〔知識・技能（コンピテンシー）・教養からなる〕共通基盤への主な貢献

第４学習期学習指導要領におけるこの第２部は，科目あるいは教育領域から可能な寄与の総体を提示するものではない。そうではなく知識・技能（コンピテンシー）・教養からなる共通基盤の５つの領域の獲得に向けて，学習指導要領からの本質的かつ固有の貢献を示すものである。

領域１ 考え，コミニュケーションするための言語（ランガージュ）
この領域は諸言語（ランガージュ）を使用の観点からではなく，獲得の原理という観点から検討する。この領域では，暗記，トレーニング，無意識化の方法，さらにこの領域が錬成する学習対象の考察方法，何よりもまずフランス語についての考察方法の確立が求められる。第４学習期では，頭の中で行うこれら４つの操作の獲得は継続して行われる。しかし考察の重要性が増大する。重要なのは，複雑な規則を自身のものにし，かつそれに習熟すること，科学を実践すること，書きことば，話し言葉によって，そしてイメージ，音，あるいは身振りによって理解し，コミュニケーションをとることである。 表現，対話のために厳密さを発揮する能力，行動するためあるいは問題解決するために多様な状況に適応することは領域１の核心である。 生徒は理解と話し合いを可能にする規則と規範を遵守する。これによって，生徒は自身の直観や自然な感覚にもとづいた言葉の運用から，考えた上での〔発話の〕実現に段階的に移行する。これには発話を行う自身の行為を組織し定式化することが必要である。第４学習期において，生徒はコードそれ自体を学び，コードには無限の力があると同時に，考え・行動する自由へと開かれたシステムであることを理解する。 **フランス語を使うことによって，話しことばと書きことばで理解し，表現する** 第４学習期のフランス語は多様なテクストを理解すること，特に暗黙の意味の認識による理解を目指す。また，個別の意図・状況によるさまざまな文章（テクスト）の作成，コミュニケーションの状況に対応した明確な話し言葉の表現を目指す。同じく生徒は言語についての考察を進め，それにより〔言葉を〕言い換え，入れ替え，解釈し，伝達することができるようになる。 あらゆる科目領域は言語の習熟に貢献する。歴史・地理，科学と科学技術は，世界の理解を可能にする固有の言語（ランガージュ）の獲得に資する。芸術は芸術言語（ランガージュ）を理解する力，芸術言語（ランガージュ）の受容について伝達する力を育成する。道徳・市民教育は道徳的感情の表現と，論拠に基づいた議論のトレーニングになる。情報・メディア教育は，他者との関係構築および自律性構築の媒介である情報・コミュニケーションシステムの習熟を支援する。 **外国語もしくは地域語を使って理解し，表現する** 外国語もしくは地域語の教育により，以下のようなことができるようになる。すなわち，複数の言語での文書・口頭による理解能力と表現能力を広げ，かつ多様化すること。あるコミュニケーション様式から別の様式に移行すること。相互に反応し学ぶために多様な言語手段を行使すること。言語の機能の仕方，その内的な変動，言語間の隣接性と距離について考察すること，である。 科目の総体が，外国語もしくは地域語による資料の読解，理解，作成に貢献する。そして，これらの資料が他の文化的コンテクストへのアクセスを促す。 **数学・科学・情報科学言語（ランガージュ）を使って理解し，表現する** 数学・科学・科学技術は，科学・科学技術に関する多様な資料を読み，理解し，産みだす能力の養成に資する。これらの科目領域は日常言語（ランガージュ）の形態から科学もしくは科学技術言語（ランガージュ）への移行，あるいは逆方向への移行を手助ける。

数学からは以下のこと学ぶ。すなわち，量と寸法を表現すること，自身の位置を把握すること，問題を解決するために数を使うこと，モデル化のために大きさを使うこと，問題を解き，現実世界の複雑さにアプローチするため一般的図形の特徴を使うこと。

科学・科学技術に関する科目はすべて，データ表の読解と精査，および数値化された情報の処理に関わる。また，特性を一般化し，問題を解決するための代数言語にも関わる。

同じくこれらの科目は，自身の考え方，結果，選択について伝達すること，科学・科学技術に関わる議論の際に自身の考えを表明することを教える。表・グラフ・図の読解，解釈は他の知の領域も豊かにする。

芸術・身体言語（ランガージュ）を使って理解し・表現する。

美術と音楽教育はことに上記の目標に貢献する。すなわち，以下のことを教える。芸術的な狙いを込めて造形言語を構成する要素を取り扱うこと。自身の話し声，歌声を制御し，声の調子に抑揚をつけ，演目を演奏し，集団の中で自身のパートを担当すること。芸術的プロセスに対する自身の認識，感覚，理解を明示し，作品の受容に関する議論に参加すること。

体育・スポーツは以下のことを教える。すなわち，運動中に使用し，かつ運動の媒介となるコミュニケーションシステムを練り上げること。共通の言語を身につけ有効な技術を使いこなすこと。決断すること。個人によるにせよ，集団によるにせよ，スポーツあるいは芸術活動を行う最中に他者の行為を理解すること。

領域2
学習の方法と道具

生徒としてのあり方は，大人を手本にすることによって身につく。だが，本領域が明示する規則と取り決め（コード）を自身のものにすることによっても修得できる。この点の重要性は学業の成功にとって決定的であり，知のあらゆる領域に関連する。大切なのは，教室での勉強，生徒個人の勉強である。勉強量は学習期を通じ徐々に増えてゆく。これにより勉学の継続に必要な自律性を獲得できる。重要なのは固有の方法に関する授業でもなければ，知の世界の入り口での事前学習でもない。まさしく科目ごとの学びの運動において，また，学校生活のさまざまな場所と時間において，それぞれの科目に固有の学習方法，および全科目で利用可能な学習方法に注意が払われる。現代世界は学校に，ますます増大する情報へのアクセスを可能にするデジタル・ツールを導入した。情報の処理は重要な技能（コンピテンシー）となる。領域２では，単に情報だけでなく知識の獲得を目的に，これらのツールが良心的に使用されることを目指す。これらのツールがもたらし得る可能性だけでなくリスクを，そして利用する側の責任を意識したユーザーを育成するためである。この目的に向け，特別教室，図書室，デジタル学習環境は整備される。

この領域は，あらゆる形式で行われる協働・連携作業に関連する。この作業は，授業内にせよ，生徒によって学校内で進められる計画にせよ，領域３において道徳・市民教育が奨励する価値と連携して行われる。

すべての科目が協力して学校ではどのように学ぶのかを生徒に教える。すべての科目全体が以下の学習を引き受ける。すなわち，学校言語，設問指示の理解，語彙，辞書・辞典などの常備書の扱い方，ノートの取り方である。全科目が，どうすればうまく聞くこと，読むこと，表現することができるか，その方法（ストラテジー）の獲得を支援する。

学習の組織とトレーニングは学業の成功を左右する。これらは，教室では授業と練習を通じ行われるが，授業外では，学校生活を通じ，そして図書室で実現される。それぞれの科目は独自の方法でこの目的に貢献する。科学は，例えば数学と科学技術が，練習問題と暗記用のドリル問題を通じ，また複雑な作業に生徒を対峙させることによって。体育とスポーツはトレーニング，反復練習，作業の複雑さの増大・縮小，協調，失敗の理解によって。数学と科学技術において施される情報処理の授業を通じ，デジタル機器の操作の難易度を高め，試行錯誤を通じて上達することができるようになる。生徒に委ねられる情報量の規模からして，情報を適切に探索し，利用するには方法が必要である。すべての科目がそのためのツールを提供する。また，情報・メディア教育はデジタル学習環境の整備を教える。

科目内，そして科目間のプロジェクトの実施には，多様な教育リソースが動員される。

芸術的プロジェクトは，造形的あるいは音楽的表現リソース，資料のリソースそして文化的リソースを用いることが必要である。言語（ラング）は，書くこと，読むこと，調査，外国あるいは地域の話者とのコミュニケーションが連携するプロジェクトと話し合いに，体系的かつ計画的に貢献しうる。

これらのプロジェクトは協働に関わる技能（コンピテンシー）を育成する。それは，例えば，他者と共に身体や運動性を育成する時，ある受け手に向けてマルチメディアを駆使した活動を構想する時，あるいは学校において情報の権利と倫理を尊重した出版物に参加協力する時などである。

メディア・情報教育は，情報の探索方法の習得と，さまざまな科目で行われる情報の活用法の習得から始まる。

メディア・情報教育により，情報の信憑性，適切性について問いかけ，媒体によって情報源を区別できるようになる。

メディア・情報教育はツール，情報の組織のされ方，利用可能な資料・情報施設を活用する手助けとなる。

科学と科学技術はデジタル・ツールの習熟に大きな役割を果たす。これらの科目はデータベースを活用すること，データの体系的測定と処理，デジタル的側面とグラフィック的側面との連携を教える。より特殊なケースでは，これらの科目により自然現象を分析もしくはシミュレーションし，予想を確かめ，現場の情報もしくは実験室の情報を収集・集約し，科学技術が作り出した事物・システムの技術レベル，それらの科学技術的環境を分析できる。

他の科目もこの教育に寄与する。フランス語は，デジタルであるか否かを問わず，さまざまな情報源の処理によって。造形美術は，さまざまなデジタル芸術作品の性質を同定することによって。また，これらの作品が形の概念に及ぼす影響を実際に測定することによって。そして歴史地理は，情報について議論し，あるいは地図表象を紹介，流布，制作するという役割によって。

領域３
人と市民の養成

人の養成，そして市民の養成はすべての授業科目と道徳・市民教育の領域である。この養成には一般教養が不可欠である。一般教養は個人による選択と個々の倫理的な関与を照らす知識を提供するからである。この養成は批判感覚，他者に開かれた理解力，個人・集団の責任感を育成する。そして個人・集団の責任感が，共和国およびさまざまな人権宣言に記された根本的な価値を，議論・個人参加・行動によって活かす。つまり，人と市民の養成は，以下に示す基盤の他のすべての領域を動員するのである。すなわち，自身の感情と考えを表現する能力，他者を尊重しながら論争に参画する能力。一般的に集団および社会で生活し，働く能力。真実とその証明に到達し，真実を単なる意見と区別することを可能にする科学・科学技術に関する知識。そして，科学と科学技術の適用が孕む倫理的争点を理解することを可能にする科学・科学技術に関する知識。市民感覚の理解，社会における個人の重要性の理解，そして防衛の義務の理解に不可欠な文学・歴史的学識。

芸術系の科目はとりわけ感受性を育成する。しかし，これらの科目は同じく，他者の好みを尊重する習慣，流行や先験的な考えを越える習慣を養成する。

フランス語，芸術史あるいは歴史・地理は，論拠に基づいて異なる見解と議論を行うよう誘う。この議論の中身を通じ，これらの科目は，とりわけ社会的に敏感な問題や時事問題に関わる感情・判断の語彙，感受性や考えを育成する。

あらゆる科目，とりわけ生命科学と地球科学，道徳・市民教育および学校生活のさまざまな時間は，言語（ランガージュ）の使用における他者の尊重と配慮，としてあらゆる形の差別に対する闘いに貢献する。現用外国語・地域語は諸文化の尊重と対話の可能性を開き，国内外を移動する準備となる。人と市民の養成は社会で通用している法律規則を知り，理解することが前提となる。具体的な事例の学習により，歴史，地理，そして道徳・市民教育は，司法の基本原則と社会の仕組みに関わるルールを身につけること，客観的なものと主観的なものを区別することを習慣づける。メディア・情報教育は，サイバー空間上のアイデンティティーや痕跡といった概念の入門教育を行う。これらの概念に習熟することが，情報・コミュニケーションの責任ある実践につながることは言うまでもないからである。

道徳・市民教育は，民主主義の基本原則と人権宣言が担う価値についての導入教育を行う。

これらの規則は，体育，スポーツ，芸術活動同様，学校内における実践と生活にも関わる。これらの規則が技術発明，自由，安全の源であることを理解すれば，他者とりわけ異性のクラスメートと肯定的な関係を築くことができるからである。学校生活は集団生活のルールを守り，自身の権利と義務を知ることを学ぶまたとない時間である。

判断力の育成は第4学習期の特に重要な狙いの一つである。それぞれの科目が独自のやり方で貢献する。例えば，ニュースやマスメディアが取り上げる対象のソースを批判的に評価することを教えることによって。また，身体活動を評価するための規則を練ることを学ぶことによって，数値情報を分析することを学ぶことによって，あるいは好みで判断する際の基準を作ることによって。

あらゆる科目は論理的な考え方と証明に根拠を与え，その対象を拡大することに貢献する。現用外国語と地域語は自身とは異なる視点に導き，自身の習慣とものの見方から距離を取り，それらを顧みる助けとなる。道徳・市民教育により帰属意識の多様性が理解できる。また，いかなる点においてライシテは信条の自由と市民の平等を護っているかも理解できる。文学的教養は重大な問題提起についての議論を育む。数学，そして科学的・技術的教養は批判精神と真理を求める姿勢の育成に役立つ。真理により，私たちの生活，私たちの世界観，私たちと環境との関係に発見・発明が及ぼすインパクトを評価することができる。メディア・情報教育は，報道機関のニュースやSNSと関連した，民主主義に関わる議論を問い正さずにはいない。

いくつかの科目にまたがる計画学習は，計画が必要とする技能（コンピテンシー）を使うこの上ない枠組みである。計画には，実際の行動を通じこれらの技能（コンピテンシー）を動員し，育成する率先的行動が必要である。科学および科学技術に関連する科目は試作品の構想・作成の段階において，個人あるいは全体による手作業において，計画性，起業精神といった考え方を働かせることができる。

これらの率先的行動と積極的関与，連帯的活動への参加あるいは学校の諸組織への参加，ホームルームへの参加には，実際に市民性を行使することが求められる。

領域４
自然の体系と技術の体系

領域４は，人間社会の歴史と連携して，科学の歴史を学習するのに，唯一ではないにせよ，最適な場である。この領域では，科学によるモデル化の初歩的な基本事項を学ぶことができる。また，数学の力を理解すること，宇宙の無限の大きさから無限の小ささ（細胞から原子まで）にいたる次元を意識することの重要性を理解することが可能となる。生徒は多様な尺度と比例を常に使うようになる。生徒は時間・空間の尺度のように自明に見えるものを相対化する。第４学習期で生徒は，自然なものであるにせよ，人間の活動に関連するものであるにせよ，危険の存在を意識する。そして，その自然的・人的原因と結果を分析する。彼らは行動，あるいは栄養と結びついた公衆衛生の問題への関心を高める。そして，体育の授業に予防の具体例を見出す。彼らはものの世界，その生産，デザイン，ライフサイクルを調査する。それらが日常生活においてどのように使われているかを見きわめる。

数学をはじめとする科学は，自然現象の記述と説明を目指す。そのために測定し，結果を活用する。物質，生物，エネルギー，環境の分野の知識を動員する。原因とモデルから影響を予想する。規模と次元を意識しながら，私たちが宇宙に占める位置を把握する。

科学技術（テクノロジー）は，さまざまな必要に対応するものと技術体系を記述し説明する。そのために，既存の使用法を分析し，ものの機能の仕方・性能をモデル化し，やりとりされるデータ，エネルギーの流れの特徴を把握する。

体育とスポーツは，身体の動きと肉体的労力を統御する現象の理解を助ける。また，考えおよび動作の器用さに感情が及ぼす効果を見きわめる助けとなる。

情報・メディア教育により，メディア製品が近年経験した科学技術上の進歩を知り，それに習熟することができる。

科学は，数学言語がもつ数値，幾何，図表，統計，象徴の領域を駆使して，世界の複雑さを表象し，モデル化し，把握する助けとなる。科学は，問題解決，試行錯誤，推測，確定というアプローチによって，帰納・演繹の訓練をする。同じく数値あるいは文字を用いた計算，幾何，代数によって論理的な考え方の育成に貢献する。また，〔図表，グラフなど〕といった表象ツールを駆使してデータの整理・分析をすることによって，科学はデータを解釈し，決定を下すことができるようにする。さらに，安全規則を遵守しながら実験することを教える。

これらの調査を行うにあたり，情報・メディア教育は貴重な手立てである。的確な手がかりを探知し，情報源が有効であるかどうかを確定することにより，情報・メディア教育は一般に流布している科学情報と偽の科学情報を選別する手助けとなるからである。歴史・地理も問題提起という方法に貢献する。教室で受け取った情報の選択に関する戦術を提供し，それらの情報を〔図，グラフなど〕表象することにより，出来事，概念，国土の編成を説明するからである。

科学技術という科目は，科学技術の応用を知識に結びつけ，さらに，科学技術の進歩を科学分野における認識の進歩に結びつける。科学技術は，技術製品，技術システムの全体もしくは一部を構想，実現させる。科学技術はものやシステムの実現プロセスを研究し，ハードウェアあるいはデジタルによる問題解決に向けた試作品を構想し，試作品の性能の向上に努めるからである。

芸術は以下の点に貢献する。すなわち，世界を解釈すること，社会で行動すること，理性的であると同じく感覚的な問題提起の論理を通して社会環境を変化させること。この問題提起の論理は，造形作品を具体的に製作することにより，複雑な問題の解決を可能にする。あるいは芸術は，ある感情，視点，独自の感覚，ナレーションのための音楽プロジェクトの実現を可能にする材料，技術を試すことに役立つ。

科学，とりわけ数学と科学技術は，環境，地球の自然資源，健康，技術的進歩の用途に対する責任ある態度とはどのようなものかを理解し，そうした態度を取るために，道徳・市民教育と連携し，基礎的な知識の再学習を行う。こうして科学はこれらの分野で個人の責任と集団の責任を区別する助けとなる。

体育・スポーツは運動の実践により健康第一の原則の構築に貢献する。

領域５
世界観と人間の活動

第４学習期において生徒は，将来のリセの教育の特徴である，批判精神と論争しようとする姿勢を育て始める。過去の痕跡を学び，集団的そして個人的記憶を学び，さらにこれらの記憶が産み出した作品を学ぶことにより，生徒は歴史意識を育成する。生徒はこれらを自身の生活と関連づける。そして，自分たちが生きる社会が，遠くの世界，多様な文化と信仰へと広がっていることを感じるはずである。生徒は自身の課題を引用で満たし始める。彼らはこれらの引用を自家薬籠の物とする，あるいは意味をずらし新しい意味を生み出す。時間と空間の経験をこうして広げることにより，人間社会における情報とメディアの発展について学習することが可能となる。そして，見えるものと見えないもの，明示的なことと暗黙のこと，現実とフィクションの区別ができるようになる。風景および，今日人間の大部分が暮らす都市空間を学ぶことにより視野が広がり，現代人によって作られた社会の複雑なシステムをよりよく理解できる。この領域はまた，創造性と想像力，問題提起と解釈の質が養われる領域でもある。これらは領域３と連携し，個人の社会参加と判断力に訴える。

歴史と地理は，行為者，事件，場所，美術作品，人間が作った生産物を互いに結びつける時間的手がかりを確立し，また，経験上の空間と細分化された世界を結びつける空間的手がかりを確立する科目である。しかし，他の科目分野あるいは教育上の分野も，同じくこれに貢献する。例えば，メディア・情報教育がそうである。この科目は書きことばとその媒体に関する歴史の基礎を教える。

本当に重要なのは，生徒が自身の教養を築く手助けをすることだ。例えば，フランス語では，体系的で生きた文学的教養を身につける。芸術的領域と芸術史では，男性と女性の歴史，思想史・社会史と結びついた創造プロセスとして，作品と空間・時間との関係を問う。また，感覚に基づいた経験と，客観的な学習を通じ，遺産であるいくつかの主要作品を熟知するようにする。科学と科学技術はこれらの作品の発展に関する歴史意識を育てることにより，主要作品を熟知することに貢献する。なお，作品の発展とは，作品の変遷と社会への影響を指す。

さまざまな科目と教育領域と向き合うことにより，生徒は社会という世界の中に自身を位置付けることを学ぶ。生徒は歴史・地理によって世界の政治組織，地理組織，そして文化組織に触れる。生徒は道徳・市民教育により，男性として，女性として，そして市民としての責任を理解し始める。同じく，公共空間と私的空間の区別という，必要不可欠な区別によって，また，メディアとは認識・認知すべき世界についての表象を伝えていることを理解することによって，生徒はコミュニケーション・ツールの使いかたを学ぶ。

科学的教養そして科学技術に関わる教養を伸ばすことにより，生徒は科学・科学技術と社会との間には緊密な繋がりがあることを理解する。彼らは，イノヴェーション，とりわけデジタルに関連するイノヴェーションの影響と継続性の重要性を認め，評価することを学ぶ。

社会の組織とその仕組みを自分のものにすることは，これらが構築されるプロセスを知ることによっても可能である。さまざまな科目が，こうした組織とその仕組みは多様な人間の経験に由来していることを理解させてくれる。これに対するフランス語の貢献は，テクストの象徴的側面を見分けること，テクストを歴史的文脈と多様な受容において理解すること，テクストを解釈し，テクストに対し個人的かつ論拠に基づいた判断を表明することを通じてなされる。現用語は言語と文化の多様性に関する知識と，この多様性と結びついた論点への理解を広げる。

芸術教育は，芸術的営為の特殊性を体験し，理解する助けとなる。これら芸術的営為は世界の表象，人間存在についての問い，解釈そして提言であるとみなされる。

その複雑なプロセスにおいて世界を表象することは，プロジェクトの実現を通じて行われる。これらのプロジェクトは特に科目横断演習の枠組みの中で展開される。それぞれの科目はこの演習に個々の科目としての独自性を提供する。科目横断演習においては，常に成果物という目標がある。成果物は，マインド・マップ，概要図，スケッチの制作による世界の複雑さの説明でも，展示，演劇，フィクションあるいは詩の執筆による個人もしくはグループの創造性の表現でも，あるいは情報メディアの製作でも構わない。

これらの自発的活動は，問題・課題と立ち向かうことを通じて創造性を育成する。例えば科学技術（テクノロジー）では，今日の技術製品，技術システムを進化させるのに必要な妥協を教える。体育・スポーツでは，克服すべき課題，競技，この科目が企画する試合により，個々の学習活動が必要とする素養を組み合わせ，動員することを教える。これにより，自律性がより高まる。現用外国語と地域語では，多言語・多文化という状況でプロジェクトに参加することにより，移動（モビリティー）に関わる技能（コンピテンシー）を増進することができる。

第３部：授業（第４学習期）

フランス語

第４学習期におけるフランス語教育は，以前の学習期同様，学業の成功に決定的な役割を果たす。この点は，知のあらゆる分野そして社会生活で使われる読むこと，表現することに関する技能（コンピテンシー）の向上についても，文学的，芸術的教養の獲得についても変わりない。

第３学習期では，生徒はさまざまな性質の資料を読み，理解し，解釈する能力を伸ばした。その中には文学的テクストも含まれる。生徒は，ますます複雑な状況で，自身の知識を構造化し，自身に固有の考えを練りながら，書きことば，話しことばによるコミュニケーション技能（コンピテンシー），表現技能（コンピテンシー）を豊かにしてきた。生徒は，理解と表現に役立つ，明快で深く考える言語の学習を開始した。

第４学習期におけるフランス語教育は，フランス語の正しく的確な使用に基づいた自律的な思考の構築にとって，また，高校で必要とされる批判精神と判断力の育成にとっても重要なステップである。

この授業科目は，技能（コンピテンシー）・知識を軸に構成される。これらは３つのテーマに分けることができる。

- メッセージを受け取る際および産み出す際の，口頭と筆記による表現技能（コンピテンシー）の育成。
- 言語（ラング）システムの総合的理解を可能にする言語技能（コンピテンシー）の深化。これは文法，つづり，語彙および言語の歴史に関する基本的知識の学習を通じて行われる（古代語および現用外国語，地域語との連携）。
- 共通の文学・芸術的教養の構築。この教養により，国民的遺産である文学作品，現代作品，フランス語による外国文学，古代語，外国語あるいは地域語による文学を他の芸術的創作，特に静止画像や動画と対話させることができる。

フランス語教師は，自身の担当科目を構成するさまざまな要素をバランス良く連係させることに留意する。そのために，教員は共通の狙いがある目標を軸に，一貫性のある学習・活動を組織する。また，生徒の必要に応じた年間授業計画を組む。こうして，話すこと，そして書くことに関する表現技能（コンピテンシー）育成の練習は，これらの技能（コンピテンシー）の育成に特化した授業の中で，文学的テクスト・芸術作品の発見および学習と連携して実施される。これらの文章・作品は，第４学習期に適合した文学的・芸術的教養を構築するために，教師が自由に選択する。

可能なさまざまな枠組みにおいて行われるフランス語での学習は，数々の豊かな科目間の出会いを可能にする。文化的観点からと同様，言語的観点からも，フランス語の教師は，特に古代の文化と言語との比較を行うよう留意する。同じく，教師は芸術史のテーマ群から自由にテーマを取り出し，プロジェクトを練り，言語芸術，他の芸術および歴史との間に関連を打ち立てる。さらに，フランス語教育は，メディア・情報教育に決定的な役割を果たす。フランス語の授業ではデジタルの教育資源は大きな位置を占め，教室での日常的な学習に取り入れられる。同様に，これらデジタル

の教育資源の使用法，またその使用に伴う問題点を考察することが重要であり，この考察も日常的に行われる。最後に，フランス語の教育は，論証する技能（コンピテンシー）を育成する。同時に，文学作品が提起する人間に関わる重大問題を発見し，批判的に検証することにより，生徒の市民・道徳教育にも大きく貢献する。

錬成する技能（コンピテンシー）	基盤の領域
口頭で理解し表現する ・口頭での複雑なメッセージ，スピーチを理解し，解釈する ・聴衆に向かって話す際に，冷静沈着に自分の考えを表現する ・話し合いに建設的に参加する ・言葉がもつ表現の可能性，創造性を活用する	1，2，3
読むこと ・自身の理解を点検する，自律的な読者になる ・非文学的テクスト，イメージ，雑多な要素からなる資料（デジタル資料を含む）を読む ・文学作品を読み，芸術作品に親しむ ・文学テクストの解釈を練る	1，5
書くこと ・文書の主な機能を活用する ・効率よく書くための作戦，方法を取り入れる ・読書を活用し自身の文章を豊かにする ・直感的な論証に頼ることから，より行き届いた論証の使用に移行する	1
言語（ランガ）の仕組みを理解する ・話しことばと書きことばの違いを知る ・単文と複文の仕組みを分析する ・語彙のつづりと，文法的つづりを強化する ・語彙を豊かにし，構造化する ・文章およびスピーチの分析と作成を可能にする概念の構築	1，2
文学・芸術的教養の基礎の獲得 ・テクスト，芸術・文学的創作を解釈するため，そして自身の表現を豊かにするために文化的知識（レフェランス）を動員する。 ・多様な文化と時代から生まれた文学・芸術的創作の間に関連を打ち建てる	1，5

話しことば

第4学習期における話しことばの教育は，話しことばの規則により分類されたさまざまなジャンルをさらに深く学ぶよう生徒を導く。そのために，規則により分類されたジャンルの練習を重ね，その特徴を同定する。読むこと，書くことと連携しながら，話しことばに特化した時間を設ける。明快な学習方法により，生徒は推敲を重ねたスピーチを聞き，それを有効活用できるようになる。生徒は自身でスピーチを考え，効果的な準備に基づき，表現を錬る。こうして生徒は，よく考えられ構成のしっかりした議論が展開される討論に彼らなりの貢献ができるようになる。

学習期末に期待される学力
・推敲を重ねたスピーチ（物語，講義風の発表，ドキュメンタリー番組，ニュース等）を口頭で理解し，解釈する。 ・5分から10分の口頭での発表を準備し，実際に発表する（文学作品，あるいは芸術作品の紹介，調査・研究結果の発表，論拠に基づきある視点を弁護）。 ・建設的に，かつ他者の発言を尊重しながら，議論に加わる。 ・文章をはっきりと，そして分かりやすく音読する。文学テクストを暗記して語る。芝居の演技に参加する。

口頭での複雑なメッセージ，スピーチを理解し，解釈する	
関連知識と技能（コンピテンシー）	生徒にとっての状況・活動・道具の例
・スピーチの狙いを特定する。	・注意深くかつ積極的な聴取，他者による話しの引用，要約，言い換え。 ・スピーチが含む情報の階層化，重要な情報の暗記。
・明示的な意味内容と暗黙の意味内容を区別する。	・根拠に基づき，明示的な意味内容と暗黙の意味内容の区別。
聴衆に向かって話す際に，冷静沈着に自分の考えを表現する	
関連知識と技能（コンピテンシー）	生徒にとっての状況・活動・道具の例
・口頭で何かについての報告をプレゼンできる。 ・読書，作品，状況に対する自身の見方を共有してもらうことができる。 ・口頭で表現するために，文書の媒体を駆使できる。 ・紹介もしくは朗読された文章を記憶するテクニックを駆使する。 ・話しを語ることができる。	・作品，作者の紹介。 ・テクストを読んだ後に，その反応を言葉にする。ある視点をプレゼンする。 ・個人的な考え方の説明。 ・要約，口頭でのナレーション，ナレーション技術のトレーニング。 ・読むこと，書くこと，言語の学習において行われる活動と連携した語彙の増強。
話し合いに建設的に参加する	
関連知識と技能（コンピテンシー）	生徒にとっての状況・活動・道具の例
・話し合い，会話，調査・研究をする際に，他者と関係性を構築できる。 ・討論に加わり，論拠に基づいた意見を表明し，他者を考慮する。 ・討論を進行し，仲裁する。	・さまざまな状況で，クラスで話し合う。 ・さまざまな討論（解釈に関わる討論，文学に関する討論，読書サークル）。 ・公の場という状況で，会話に関する決まりごとの知識を使用する。礼儀作法の行使。 ・論証テクニックに関わる知識の使用。
言葉がもつ表現の可能性，創造性を活用する	
関連知識と技能（コンピテンシー）	生徒にとっての状況設定・活動・道具の例
・声，息づかい，視線，身振りがもつ可能性を駆使し，以下のことに活かせる： ・読む。 ・暗唱する。 ・戯曲の一場面，一編の詩を演じる。 ・口頭での発表の際に抑揚をつける。	・文章（テクスト）の音読と暗記。 ・音声化と演劇化。 ・発表，報告等。 ・文章，音声，イメージを組み合わせる技術。 ・デジタル技術を駆使し，音声を録音し，文章，音声，イメージを組みわせる。

文書とイメージの読みと理解

第４学習期では，前の学習期で開始した意味の構築に関わる練習を継続する。意味の構築は語彙，

構文，および文章の一貫性についての学習，暗黙の意味を明確にする作業，そして描かれていることを思い浮かべる力の育成によって行われる。この学習は第４学習期において複雑さを増しながら継続される。この学習は話し合い，解釈をめぐっての討論，作業用文書と創作文書の作成により進行し，実りあるものとなる。

第４学習期で読む文章はより多様で，長く，複雑である。これらの文章は，読者への効果を意図して使われるジャンル，スタイルの諸特徴に対してより繊細なアプローチを要する。解釈，論拠に基づいて判断を練成する練習は，学習期を通じ高度になり，学習期の中心的学習となる。生徒はより難解な文章を発見する。そのような文章では，暗黙の意味，文章の狙いの本質，間テクスト的な知識（レフェランス），文化的文脈を突き止め，理解する必要がある。第３学習期同様，生徒は文学テクストと同じく，資料的文章を読みこなす。それは，思想に属することもあれば，情報メディアに属することもあれば，科学メディアに属することもある。

静止画像にせよ，動画にせよ，イメージは第４学習期における貴重な教育資源である。イメージは生徒に文学テクストを具体化しその知覚を助ける。同じく，イメージは，文章に用いられる意味的手法に類似した手法を生徒が経験する機会を提供する。そして，イメージ，文章のそれぞれに固有の分析方法を展開する機会を提供する。またイメージは，文学的教養と対話すると同時に，それを豊かにする補完的教養に触れる道を開く。

就学期間を通じ，個人的な読書，楽しみのための読書は奨励される。何を読むかの選択は自由である。生徒は自身の好みと計画に合わせて定期的に本を借りだす。これらの個人的な読書は家庭でも話し合われるが，それを教室で報告する取り組みが予定されている。

学習期末に期待される学力
・一人でさまざまな文章，イメージ，多様な要素からなる資料を，異なる媒体（紙，デジタル）で読み，理解する。 ・文学テクストを読み，解釈する。ただし，解釈はいくつかのシンプルな分析装置に基づいて行う。 ・文学テクストを歴史・文化的文脈に位置付ける。 ・作品全体を読み，報告する。 ・学習期のそれぞれの学年で，少なくとも，授業で学んだ遺産文学から３作品全体，また特に若者向け文学から３作品全体を通読する。さらに少なくとも３つのテクスト群を読む（分析的読解もしくは通読）。

自身の理解を点検する，自律的な読者になる	
関連知識と技能（コンピテンシー）	生徒にとっての状況設定・活動・道具の例
・自身の文章理解を自律的に確かめる。 ・文章に的確に基づいて，自身の解釈の正しさを説明できる。 ・自身の読みを明示された目標に適合させることができる。	・文章理解のための授業，第３学習期に行われた練習の延長として実施：目標を明示し実施する学習活動。以下のようなことができるようになる。すなわち，全体的な意味を構築する，名詞の代替を無意識のうちに見つける，再読により文脈から単語の意味を明らかにする。

・自身の読解レベル，好み，必要に応じて読む本を選ぶことができる。	・読解に関する仮説の言語化と，その手がかりの探索。これは，文章を読む際にさまざまなタイミングで暗黙のうちに行われている。 ・楽しみのための読書，仮説を確かめるための読書，学ぶための読書等。 ・教室の文庫，コレージュの図書資料室，市町村の図書館もしくはメディアセンターといった，生徒の生活環境の中で利用可能な図書館と図書資料室の定期的利用。
非文学的テクスト，イメージ，雑多な要素からなる，資料（デジタル資料を含む）を読む	
関連知識と技能（コンピテンシー）	**生徒にとっての状況設定・活動・道具の例**
・学習するさまざまな資料（新聞・雑誌，科学メディアの記事，エッセー，資料文章，概要図，グラフ，表，静止画像・動画等）のジャンルとしての特徴を知る。 ・静止画像・動画を描写し分析できる。	・学習資料の性質，出典，特徴の識別。 ・情報の探索とすでに与えられている情報の関連づけ。 ・静止画像（絵画，写真，造形芸術，広告等）の読解。文学・芸術的教養，芸術史，あるいは歴史の学習指導要領と連携し，いくつかのシンプルな分析装置を駆使して，新聞・雑誌，風刺画，芸術作品，漫画等に見られる絵を読解。 ・動画の読解。いくつかのシンプルな分析装置を駆使して，映画・広告から採られた動画イメージの記述と解釈。 ・芸術作品，あるいは小規模の資料体（コーパス）についての，口頭でのプレゼンテーション。
文学作品を読み，芸術作品に親しむ	
関連知識と技能（コンピテンシー）	**生徒にとっての状況設定・活動・道具の例**
・異なる文学ジャンルに属する作品を読む。 ・歴史の学習指導要領と連携し，異なる時代に属するテクストを読む。 ・文学作品と芸術作品を関連づけることができる。	・朗読された，あるいは語られた異なるジャンル（お伽話，小説，短・中編小説，演劇，詩）に属する文学テクストの全編もしくは抜粋を**聴く**。 ・生徒の年齢に合わせて翻案された，異なるジャンルに属する文学テクスト，および文学作品の**通読**。黙読，音読，感情を込めた読み等。教室で始める読み，説明つきの読み等。紙媒体もしくはデジタル媒体。 ・**書くこと，話すこと，聴くことと連携した読解**。口頭でのプレゼンテーション。さまざまな形で行う読書報告（デジタル形式での実施も可能），討論，作業用文書（ノート，概要図，表等），および創作文。 ・**文学テクストと芸術作品の関連付け**。これら芸術作品は，その美学，創造をめぐる文脈，テーマが多彩である。 ・科目横断的観点からの展望。これは造形的，音楽的，演劇的創作になることもありうる。しかし，たとえば，歴史あるいは科学における課題になることも可能である。 ・デジタル・サイトの閲覧も含んだ，美術館・博物館，展覧会の見学，そして見学報告の作成。

文学的テクストの解釈を練る	
関連知識と技能（コンピテンシー）	生徒にとっての状況設定・活動・道具の例
・諸ジャンルの主な美学上の特徴を知る。 ・読んだ作品を時代，執筆をめぐる文脈に据えることができる。 ・歴史の学習指導要領と連携し，文学史・文化史上の基準をもつ。 ・文学言語がもつ美的かつ意味上の効果を知覚する。 ・これらの効果の原因を分析できる。文学的分析，文体的手法の概念。	・読書の感想を言葉にする。 ・テクスト（テクスト群，作品全編からの抜粋）分析の活動。構文，語彙，いくつかの主な文体的手法，言表……の観察，および解釈。 ・音声化と演劇化。 ・同一テクストあるいは同一の一節についての相反する解釈の対峙。テクストの構成要素に基づいた，解釈の論証。 ・好みによる評価を言葉にする。この評価は，クラスメートあるいは教師との討議の際に修正可能。

書くこと

第４学習期では生徒が書く文書は，つねに文学作品の学習，文法・語彙・つづりの授業と連携する。

生徒は文書のさまざまな機能を探査し，書く上での戦略をより充実させる。書く活動を多様化し，頻繁に行うことで，生徒は言語が提供する可能性と読書からの収穫を，より行き届いた作文に生かすことができるようになる。

トレーニング的な活動をある程度重視して，書くことに関するいくつかの側面を無意識化すること，および文脈に適い，かつ多様な戦略・手法の育成を支援することが望ましい。

文章作成と言語の学習の間に，さまざまな形で連携を打ち立てることが重要である。それは，言語の授業の先取り（言語のある学習ポイントを学ぶ前に文章を書いてみる），延長（授業で学んだことを適用するために書く），復習（言語の学習によって獲得した知識により，自身が書いたものを改善する）という形をとりうる。

文書を書くことにより頭を使うようになり，生徒は自分が書いたものをより自律的に改善できるようになる。練習・学習のために文章を使うことができる。文章とは自然に完璧に書けるものではないこと，最適の言い回しを見つけ，自身の意図・考えを正確に述べ，ある考え方を説明するには，推敲が必要であることを理解する。

生徒を励ます教員の前向きな視線，意義があり，やる気を生む状況設定，クラスメートとの協働，これらが書くことの喜びを生み，言語とその仕組みへの好奇心を刺激する。

学習期末に期待される学力
・さまざまな媒体（紙，デジタル）に文書で，気持ち，視点，論拠に基づいた判断を伝える。また，その際にはメッセージの受け手のことを考慮し，書き言葉の主な規範を遵守する。 ・文学作品もしくは芸術作品の受容を，文書によって言語化する。 ・作文に関する指示に応じて，学習指導要領の文学ジャンルに収まる創作文を作文する。また，その際には文章の一貫性を確保し，書き言葉の主な規範を遵守する。 ・文章を使って考える，勉強の道具にする。

文書の主な機能を活用する	
関連知識と技能（コンピテンシー）	生徒にとっての状況設定・活動・道具の例
・文章を書くことの歴史的かつ社会的役割を理解する。	・文書のさまざまな使用法（社会的，個人的，文学的等）の発見：大作家たちの書簡（プライベートな手紙，雇用依頼の手紙，展覧会のポスター，新聞の第一面等）。 ・媒体（紙の手紙／電子メイル等）による言葉遣いの違いを観察。 ・新しい媒体に書いてみて（タブレット，コンピューター上での作文），その機能を知り，可能性を活かす。
・考え，学ぶために文書を駆使する。 ・定期的に**作業用文書**と**考察用文書**を使用する。 ＊**作業用文書**：作業の準備のため，考えを形にするため，分類するため，要約するため等。 ＊**考察用文書**：考え方を説明するため，解答・意図を論拠に基づいて説明するため。 ・**ノートテイク**のテクニックと活用法を知っている。	・リストの作成，決まり文句の練習，概要図，スケッチ 作文は，授業時間中のさまざまな時間帯，特に学びのさまざまな段階で役立てなければならない。 ・異なる媒体上でのノートテイク，ノートテイク後にさまざまなノートを比較。 ・学習の道具の作成（下書き，概要図等）。 ・フランス語のあらゆる分野で頻繁かつ定期的な作文（言語，書くこと，テクストの学習，語彙等） ・自律性と想像力を育成する設問を提示しながら定期的なトレーニング。 ・授業時間（語彙，テクストの学習，文法等，授業時間の中身がどのようなものであれ）の最後に，授業中に取ったノートを基にした，生徒によるまとめ。このまとめは，場合によっては，暗誦課題の出発点となりうる。 ・文学テクスト，新聞・雑誌の文章，科学的文章等の特殊性を学んだ後で，さまざまな性質の文章の作文。多様な科目の授業との連携。

効率よく書くための作戦，方法を取り入れる	
関連知識と技能（コンピテンシー）	生徒にとっての状況設定・活動・道具の例
・**作文のための考え方を獲得し，実行に移す**（段階的に無意識にできるようにならなければならない）： ・テクストの準備段階から最後の再読の時まで，メッセージの受け手，テクストの狙い，テクストのジャンルの特徴，作文の媒体を考慮する。 ・書くべきテクストのアイデア，要素を見つけるための戦略を実践する。 ・書くべきテクストのジャンル，媒体に固有の規則に応じて文書を組織する。文書を自由に作文し，場合によってさまざまな媒体を取り入れるために，文学ジャンルの特徴を知っておく ・書き出しの最初の文（下書き）から文書の規則を守る。この規則はテクストの統一性と完成度を担保する規則であり，言語的な規則でもある。	・**定期的かつ，多様なやり方で書く。**特にデジタル形式で，想像力を育成する設問を提示する。 ・**短い文書と長い文書を交互に**書く：創作，論証，模倣等。 ・メッセージの受け手，状況，発話，狙い，調子等を変えて。 ・下書きを意図的に使う練習：書く狙いの言語化，文章を書く前段階の《作業プラン》の作成，概要図の使用等。 ・**書く際の習わし。** ・**文法，語彙の学習の延長としての書く機会の設定。** ・**作業用文書と考察用文書。**
・執筆中，再読の際，その事後，**自身のテクストの質を向上させる（自身のテクストに距離を取り，評価し，改良することができる）。** ・自身の弱さを意識し，修正を容易にするため，**ミスを犯しかねない部分を識別する**ことが自分でできるようになる。	・修正を容易に進めるために，アンダーライン，枠，矢印，カテゴリー分けのマークを使用する。 ・間違いの累計表を集団で作成。 ・デジタル器具による，あるいはデジタル器具なしでの文章の訂正・改善の授業（集団，個人で）。 ・辞書，校正ツール，ソフト，ワープロの使用。 ・執筆者本人もしくはクラスメイトが行う音読での再読。 ・同一の指示の下に書かれた複数の文章の比較。
・自身のテクストを修正するため，文書の規則を考慮する：**一貫性，まとまり**（構文，発話，文章の統一性を担保する構文，発話システム，意味に関わる要素），および**言語上の規則。** ・様態付与を駆使できる。	・文法と語彙の学習活動と明白に結びついた書く授業：生徒の文章から出発して（文法，語彙等に関するポイントに狙いを定めた再読），あるいは書き換え：変形の媒介となる文章から出発して（主語と動詞の一致，時制に応じての動詞の形態変化，名詞句内での一致等）。 ・発話者の疑い，確信を示す指標の駆使（条件法の使用，devoir, pouvoir…などの法動詞，様態副詞等）。 ・読むことと連携して：文章の価値づけ，音読，レイアウトに関する規則を遵守した製本。

読書を活用し自身の文章を豊かにする	
関連知識と技能（コンピテンシー）	生徒にとっての状況設定・活動・道具の例
・論拠に基づいたスピーチの主な機能と特徴を知る。 ・論拠を支える手法を見つけ出し，同定する（論点の組織，例の選択，様態付与）。 ・論証文に明快な構造を与えて，わかりやすく説明できる。	・ある事象を説明するため，問題解決，根拠づけへの考え方を共有するための説明文の作文，ある見解を取り入れてもらうための論証文の作文。 ・文学，新聞・雑誌から採られた文章を書き換えて，論証の方向性を変える。 ・ある視点に賛意を示す論証文に応え，それとは異なる意見を擁護する文章を作文する。 ・正当化，論証，比較等に対して生徒が抱える困難を取り除く練習：分類，階層化，接続語の使用，例・個人の知識・教養等の的確な駆使。

言語（ランゲ）の学習（文法，つづり字，語彙）

第３学習期では，つづりの獲得，文を構成する主な要素の理解，語彙の充実を可能にする概念の学習を優先した。そして，読むこと，書くことによって実際に言語（ランゲ）を使用することを通じて言語（ランゲ）を学んだ。

第４学習期はこれらの学びを継続し，すでに学習した概念と規則を深め，言語の仕組みに関する新しい概念，他の側面を生徒に発見させる。同じく，生徒が言語の全体的な仕組みと言語システムの組織を理解することを目指す。この目的のもと，中心的概念を基礎に学習指導要領を組み立てるという選択がなされた。これら中心的概念の学習は第４学習期を通じて段階的に深められる。記憶力と思考力を必要とするつづり，文法，語彙の練習・トレーニングはこれらに特化した授業時間に行われる。これらの授業は，書くこと，話しことば，そして読むことに対応しており，《文学・芸術的教養》が示す問題提起に沿って行われる。第４学習期の言語の学習では，文と文章に関する専門用語の知識は，言語システムの理解に応用される。

この学習の運営は，以下の展望に従って展開される。

文章の意味を自身のものとし，論拠に支えられた文学的分析を行うのに必要な，読むことと書くことの技能（コンピテンシー）に奉仕するのが文法である。これらの技能（コンピテンシー）は作文でも動員される。

文章の一貫性とまとまりに関する概念（文章の統一性を担保する構文，発話，意味要素の重視）は，読むこと，書くことの学習の際に，文脈に沿って学習する。語彙には常に注意し，構成の取れた段階的な学習を行う。進度は生徒が書く文書により決められる。

文法はつづりのために

文法規則に対しより厳密な接し方を打ち立てるため，第３学習期での練習を続行する。その際，つづりの規則性に応じて優先重要事項を設けることは継続する。つづりに対してはトレーニングを積む必要があり，無意識のうちに身につけることが望ましい。

文法は言語（ラング）についての考察に奉仕する

文法規則，文法用語をそれ自体として記憶することが目的なのではない。そうではなく，学習の目的は文，単語と句の連関を理解し，言語とつづりの正しい用法について考察することができるようにすることである。生徒は言語を規範によって組織され，制御されるシステムであると知覚している。だが，これら規範は歴史的に推移し，状況，地域，社会学的環境によって変化する一方で，一貫性，厳密性も備えており，徐々に生徒はそれを意識するようになる。生徒は，第３学習期から開始した学びを継続しながら，そして，とりわけつづりに関連する概念・メカニズムを明らかにしながら，言語の仕組みを吟味し，その組織を理解する。第４学習期では，構文を体系的に学習する。品詞と品詞間の関係を学ぶのは，品詞が構文の中で果たす機能の観点からである。言語システム全体を理解し，展望できるようになるために，話しことば，読むこと，書くことに関する学習活動の際に，学んだ知識の構造化に特化した授業を割り当てる。こうして言語（ラング）の学習は文法，つづりに対する注意深さを育成し，維持する。言語（ラング）の観察は，言語の力を意識して言語（ラング）を使うことを可能にする。それ故，話すこと・聞くこと，読むこと，書くことの学習活動にもよい影響を与える。

生徒は学習指導要領の後に示す専門用語を知っておかなければならない。

学習期末に期待される学力
・つづり，構文，語彙に関する知識を，さまざまな文脈における文章および口頭での表現，文章の検討に活かせる。 ・単文・複文を構成する主要要素を分析することができる。 ・一般に使われる単語をつづることができる，動詞を正しく活用できる，名詞句内部の一致を実行できる。

話しことばと書きことばの違いを知る	
関連知識と技能（コンピテンシー）	生徒にとっての状況設定・活動・道具の例
・構文に関する側面 ・話しことばの構文は書きことばの構文とは異なることを理解する。 ・口頭での陳述を書きことばに移し換えることができる。またその逆ができる。 ・伝えられた話しの内容を文章に挿入できる：直接話法，間接話法，自由間接話法。 ・話しことばの形と文字による形 ・書きことばが話すこと・聞くことに及ぼす影響（リエゾン）と，話すこと・聞くことが書きことばに及ぼす影響（エリジョン）を知る。	・話しことばの資料体（コーパス）の収集と筆写，書きことばの資料体（コーパス）との比較。 ・例えば，話しことばの状態で収集した話しを文書にする際に，話しことばから書きことばへ移し換える。当初の陳述を移し換えるために行った選択の比較。施された変化の分析。 ・構文上の句を探すことによる音読の準備。句読点を機能によって区別する。 ・引用された言葉を文章内に見つけ出すこと，話しの伝聞法を変化させることによる，書き換えの練習。および文脈の中で生じる効果の分析。

・語彙の側面 ・話しことばと書きことばの間にある言語レベルの違いを測る。 ・学校内では，話しことばとしては改まった話し方に属する語彙要素を使うことができる。	・言語行為（頼む，断る，詫びる等），を中心とした話しことばの資料体（コーパス）の収集，さまざまな言い方の比較，書きことばの資料体（コーパス）との比較。 ・すでに学んだ語彙に依拠した話しことばの学習活動。
単文と複文の仕組みを分析する	
関連知識と技能（コンピテンシー） 複文の仕組み ・文の主要構成要素を区別し，階層化する。 ・単文の構成要素を識別し，分析する。 ・複雑なケース（主語が離れている）でも主語を見分けることができる。 ・直接目的補語と間接目的補語に関する知識を深める。 ・状況補語を識別する（注：時間，場所，原因の補語は第３学習期で触れた）。 ・主語についての知識を深める（複数の名詞あるいは名詞句によって形成される主語，倒置された主語）。 ・非人称構文を分析する。 ・文法知識を広げる。 ・直接目的補語と属詞を区別する。 ・第３学習期で触れた名詞の拡大（付加形容詞，名詞の補語）を識別する。 ・同格を識別する。 ・品詞を識別する。 ・これまでの学習期で学んだ品詞，および句を識別する：名詞，動詞，形容詞とその級（比較級と最上級），定冠詞，不定冠詞，所有限定辞，指示限定辞，主語・目的語人称代名詞，副詞，前置詞，等位・従位接続詞，名詞句。 ・限定辞（定冠詞，不定冠詞，部分冠詞，所有限定辞，疑問限定辞，不定限定辞，感嘆限定辞，数限定辞），形容詞とその級（比較級と最上級），および代名詞（人称代名詞，所有代名詞，指示代名詞，不定代名詞，疑問代名詞，関係代名詞，関係副詞，副詞的代名詞）を区別する。 ・文の型（平叙，疑問，命令）と形式（否定，受動，感嘆，非人称）を識別する。	生徒にとっての状況設定・活動・道具の例 ・主語—動詞のつながりの探索，そのつながりを削除，移動するゲーム。 ・状況補語がもたらす意味についての考察：削除，移動，置き換え等。 ・名詞の拡大を使った，書くことの学習活動。 ・論理的に考える活動と，手順を無意識化することを目指す活動との連携。 ・電子黒板，もしくはワープロを使用し，構文の操作を行う。 ・文を拡大／縮小する活動：トレーニングのための練習，無意識化のためのトレーニング，作文等。 ・節の間の依存度を確定するための構文操作の活動。 ・文中の節の分析（節の識別）。

複文の仕組み ・単文と複文を区別する。 ・複文の構成要素を識別する（短文の構成要素からの類推を通じて）。 ・並置，等位，従位という概念を知る。 ・従位節の位置（接続詞節，間接疑問節，関係詞節，分詞節），および従位節と文の他の構成要素との関係を分析する。 ・文中の従位節の文法的機能を理解する。 ・関係詞節の仕組みを理解する，そして従位節における関係代名詞の機能を識別する。 **句読点の役割：** ・構文における句読点の役割を分析し，これらの記号が適切に使える。	・句読点の変化がもたらす効果の観察；句読点に関する選択の可能性および，制約の見きわめ。
語彙のつづりと，文法的つづりを強化する	
関連知識と技能（コンピテンシー）	**生徒にとっての状況設定・活動・道具の例**
・**一致の連鎖の仕組みを知る。** ・複雑な名詞句の中での一致に習熟する（複数の名詞，複数の形容詞，関係代名詞，tout, chaque, leur 等の限定辞を伴う）。 ・単純なケース，すなわち動詞 être と過去分詞の一致（形容詞と比較する），および動詞 avoir と過去分詞の一致（直接目的補語が先行する場合）に習熟する。 ・形容詞の一致，および同格に置かれた過去分詞の一致に習熟する。 ・複雑なケースにおける動詞の一致（主語が動詞と離れ，いくつかの名詞，人称が関与する，関係代名詞，量を示す集合名詞・配分詞，一致の起因となる言葉と動詞の間に代名詞，あるいは他の句が存在する場合）に習熟する。	・聞き取りをもとに，文法上のマークについて，クラス全体であるいはグループに分かれて議論する；リライト；つづり上の判断に関するテスト，および生徒の考察を育むあらゆる練習（規則性，そして起こりうるミスについて質問する）。 ・一致の連鎖の視覚化。 ・選択の説明（口頭もしくは書面で）。 ・生徒が書いた文章の分析，および注意すべき点を生徒に示すことができるあらゆる練習。 ・ミスのタイプ別一覧表の作成。
・**書かれた動詞の形態変化に習熟する，**規則性と動詞の分解（語幹，法と時制を示す語尾，さらに直説法，接続法，命令法の人称法では人称を示す語尾）に基づく。 ・代名動詞を知る。 ・主な時制と法を知る（人称法と非人称法）。 ・単純時制を作る：動詞に関する基本的知識から，動詞のさまざまな単純時制を作る規則を体系化する（直説法の時制，命令法現在，接続法現在，条件法現在）。	・動詞の形を観察・選別し規則性を浮かび上せらせる。 ・制約のもとに書く。

・複合時制を作る：動詞の過去分詞の形を知る（é, i, u および語末が子音字を含む形）。	・過去分詞の探索と分類。
・受動態の文を作る，および意味上の効果を分析する。	・受動態を作る練習：受動態から能動態，能動態から受動態への変形。
・すべての人称で，直説法の現在，半過去，未来，単純過去，複合過去，大過去，前未来，前過去，条件法の現在，過去，命令法の現在，接続法の現在，過去，半過去，大過去を暗記する。暗記する動詞は以下の通り： ・être と avoir。 ・第１群，第２群，第３群の動詞。 ・以下の第３群の不規則動詞：faire, aller, dire, venir, pouvoir, prendre, savoir, falloir, valoir。	・動詞の形を暗記するトレーニング。 ・文脈（読むことあるいは書くこと）から，動詞の時制の価値を明らかにする。また生み出される効果への注意喚起（生徒がアスペクトに関する専門用語を学習する必要はない）。
・使用する時制と意味の関係を明確にする。 ・観察と比較を通じ，時制の価値の初歩を学ぶ：単純時制と複合時制（非完了 / 完了）の対立；行為を全体的に把握する時制とそうでない時制の対立（境界がある / 境界がない：彼女はあるページを読んだ / 彼女はあるページを読んでいた）。 ・時制の価値がその使用法に与える影響（前景 / 後景）を観察する。 ・さまざまな法の主な使用法を知る。	・文章もしくは発話を，時制を変えてリライトする。議論を通じ，何が許容範囲で何が許容範囲を超えているかを決める，そして生み出された効果を評価する。 ・法の価値を考察するための発話の比較（彼が来ないことは私が保証する（je promets qu'il ne viendra pas.）/ 彼が来ない方が私はいい（je préfère qu'il ne vienne pas.）/ 私は来ることを約束する（je promets de venir.）。
・接辞（接頭辞，接尾辞）のつづり，および接辞が語感に与える効果を暗記する。 ・語源の知識を使用して，同じ語幹をもつ単語をつづる。 ・語形成，類推作用，規則性を観察し，反射的につづれるようにする。	・頻度表の利用。 ・壁への掲示物，単語帳への書き写し，一覧表，これらの手早くかつ定期的な再利用。 ・無意識化，言い換えの練習。 ・語彙上の制約のもとに書く練習。

語彙を豊かにし，構造化する

関連知識と技能（コンピテンシー）	生徒にとっての状況設定・活動・道具の例
・学習指導要領の文学・芸術的教養のテーマと連携した**読書と**，書くことを通じ，そして他のすべての科目における多様な学習活動を通じ**語彙を豊かにする。**	・**文脈内**（理解と表現）で，そして**文脈外**（語彙と形態変化に特化した学習活動）で単語を学習する。 ・科目横断的な語彙総覧の作成。
・紙もしくはデジタルヴァージョンによる，**辞書**あるいは他のツールの**使用により語彙を豊かにする。**	・語源による単語の分析，および辞書の使用による単語の意味の理解。

・学習した単語を口頭そして書面で，適切に使用できる。 ・語形成を観察する：派生と合成，語源と新語法，相当句，単語の書記法，特にラテン語，ギリシア語の要素から，あるいは外国語から借用した要素から：派生によりもたらされた構文上のカテゴリーの変化，およびそれが綴りに及ぼす影響を明らかにする（déménager 引越しする / déménagement 引越し；beau 美しい / beauté 美しさ等）。 ・最も頻繁に使われる接頭辞と接尾辞の意味を知る。およびいくつかのラテン語，ギリシア語の語根を知る。 ・単語を互いに関連づける（語彙場，語族，意味場によるグループ分け）そして，強度および一般性による分類。 ・単語の意味を分析する：多義と類義，反義と同型意義，ニュアンスと意味のずれ，相当句，動詞の構成と意味の変化，外示と共示および言語レベル。 ・多様なタイプの辞書とデジタルツールを使用する。	・観察，形式の操作，分類，語彙に関する知識の組織化（語彙の収集等），および再文脈化。 ・よく見られるラテン語の語根から語族を構築する。他の科目と連携して，学術的，科学的語彙に属するギリシア語の語根のいくつかの例。 ・選択問題付きのテクスト；根拠を明快に，かつコメントをつけて説明。 ・動詞の構成を明らかにするための構文操作。 ・辞書の項目を使い，意味と動詞の構成を関連づけ，動詞の多義性を学ぶ（Pierre lave une pomme ピエールはりんごを洗う—Pierre se lave les mains ピエールは手を洗う）。 ・書く際の動詞の再利用（制約のもとに書く）。
文章およびスピーチの分析と作成を可能にする概念の構築	
関連知識と技能（コンピテンシー）	生徒にとっての状況設定・活動・道具の例
・コミュニケーションの狙いによる言葉（ラング）の変化を観察する。 ・対照的ないくつかの例から出発して，何が言語レベルを決定しているのか（コミュニケーションの状況，狙い等），何が言語レベルを特徴づけているのか（話しの組織，語彙，構文）を見きわめる。 ・同じ考え，あるいは新しい考えを表現するさまざまな方法を見きわめることによって，変化を観察する：時代による単語の意味の推移，新語法，借用；場所，文脈，コミュニケーションの手段による変化。 ・読んだ文章あるいは書くべき文章の特徴を考慮に入れる： ・発話の状況の要素を識別し，解釈する：誰が誰に話すのか，どこで話すのか，いつ話すのか（人称，場所，時の標識）；書く際に発話の状況を考慮に入れる；発話と関係する一致の現象（je, tu）を探知し，利用できる。	・資料体（コーパス）に基づいた学習：教師が作った文書，そして口頭による発話表現の比較，生徒が書いた文書（訂正—添削），文学作品の抜粋，資料，口頭での学習活動（ロールプレイ等）。 ・さまざまな受け手に対する文章（テクスト）の作成。 ・欠落のある文章（テクスト）（文学的な文章（テクスト），あるいはそうでない文章（テクスト））に基づいた学習，受け手の立場から，対象となる言語要素の学習を問題化する。 ・生徒の口頭そして文書による表現に基づいた学習：文章の映写，全体での訂正—添削；デジタルツールの使用。 ・複数の語りの声，あるいは密接に絡み合った複数の発話状況を含む長い文章の執筆。

・直接的あるいは間接的に伝えられた言葉を見分け，利用する。 ・文章を組織するマーク（レイアウト，活字，句読点，結合子）を識別し，利用する。 ・能動形 / 受動形とその意味上の価値を見分ける；置換を知り，強調あるいは強意のマークをする；提示語を使うことができる；非人称文の意味的な価値。	・文章をリライトして論証的効果を入れる：疑い，確信の表現等。 ・変化，置換の練習：名詞の代用語，繰り返しを避けるための代名詞の探知；指示，特徴づけの手法，限定辞の役割：これらの概念の文書もしくは口頭表現への転換。時間，空間，論理的指標からの推理を言語化。 ・動詞の時制の探知，使用されている時制システムの識別；時制を変えて文章をリライトする。

使用用語
性質（あるいは文法クラス）／機能。
名詞（普通名詞，固有名詞／名詞句／動詞／限定辞（定冠詞，不定冠詞，部分冠詞，所有限定辞，指示限定辞，数限定辞，不定限定辞，感嘆限定辞，疑問限定辞）／形容詞／代名詞（人称代名詞，指示代名詞，所有代名詞，不定代名詞，疑問代名詞，関係代名詞）／副詞／接続詞（従位接続詞，等位接続詞）／前置詞／間投詞。
動詞の主語／直接目的補語／間接目的補語／主語の属詞／直接目的語の属詞／状況補語／名詞の補語／付加形容詞／同格。
動詞：群 — 語幹 — 時制のマーク — 人称のマーク／語尾／法／アスペクト。
直説法，単純時制：現在，半過去，単純過去，未来；複合時制：複合過去，大過去，前過去／前未来／条件法現在，条件法過去／接続法現在，接続法過去，接続法半過去，接続法大過去／命令法現在／非人称法：不定法，現在分詞，過去分詞。
能動形／受動形／非人称形／否定形／感嘆形。
節：独立節／主節／従位節。
単文／複文／動詞文／非動詞文。
能動態，受動態，代名態。
従位接続詞節，間接疑問節，関係詞節，不定詞節，分詞節。
等位／並置／従位。
直接話法／間接話法／自由間接話法。
語彙場，語族，意味場，言語レベル。
派生語，合成語，相当句。
語幹，接頭辞，接尾辞，同義，反義，同型意義，多義性。

文学・芸術的教養

文学・芸術的教養の獲得はフランス語教育の主要目的の一つである。これには，生徒が読書を好きになり，個人的に取り組むことが前提となる。この目的に向け，生徒は数多くの本を読むよう励まされる。さらに，生徒が文学・芸術的教養を自身のものにし，作品・文章の理解を整理し，磨き，解釈を深めるための知識を獲得できることが前提となる。

第４学習期において，この分野におけるフランス語での勉強はさまざまな要素からなり，４つの大きなテーマから組織されている。すなわち，「自分を探し，自分を作る」，「社会に生きる，社会参加する」，「世界を見つめ，多様な世界を産み出す」，「世界に働きかける」である。これらのテーマはそれぞれが学年ごとに固有の問題提起の対象となる。これらのテーマをめぐる学びは，学習指導要領が示すように，資料体（コーパス）に基づいて行われる。だが，この学びはテクストの学習に限定される

ものではない。書くこと，話しことば，言語についての学習に関わる学習活動も含まれる。フランス語のあらゆる知識が関連する。必修の問題提起は教師の選択による補足的問題提起により補われる。

これらのテーマと問題提起は，授業の目的を明確にする。読書と文学は，私たちをとりまく世界を理解する手がかりであることを示す。人間が自らになす問いに対する答えを提案する。そして，フランス語という科目に固有の，本質的に文学的な論点を考えることを可能にする。これらの問題提起を通じ，生徒はテクストを自身のものにし，テクスト自体を完結したものと捉えるのではなく，考察への誘いと捉えるよう指導される。それぞれの問題提起の説明は，文学上の論点と個人の形成に関わる論点についての詳細な説明，および必ず触れるべきポイントを扱う資料体（コーパス），それに限定されることのない学習可能領域に関連する資料体（コーパス）の指示と共に行われる。これらの指示は，授業に方向性を与え，教員が定める年間学習計画において文学ジャンルと文学形式の間で一定の均衡を保つことに資する。共通の教養の構築に必要な必修ポイントを定義する。また，メディア教育や他の芸術表現形式（とりわけ絵画と映画形式）への手がかりを提供する。これらの指示は特定のジャンル，文学・芸術運動，概念を研究するよう誘い，歴史の年間学習計画との関連を打ち立てる。事実，問題提起のいくつかは，異なる科目間の共同学習，とりわけ科目横断実践演習〔enseignement pratique interdisciplinaire〕に適している。

第４学習期のすべての学年で，問題提起は教師が選ぶ順番に従って学習される。それぞれの問題提起は，問題の立て方あるいは，異なる優先課題の設定に従って年間にわたって複数回，異なる時期に学習することができる。また，教師は学年で同時に２つの問題提起を同時に扱うこともできる。

コレージュ第２学年	
文学上の論点と個人の形成に関わる論点	資料体（コーパス）の指示
自分を探し，自身を作る	
旅行と冒険：なぜ未知なるものへ向かうのか？ ・フィクションであるか否かを問わず，さまざまな形式の冒険譚，そして旅を讃えるテクストを発見する。 ・他者，他所を発見しようと駆り立てる理由を理解する。そして，こうした計画，出会いに求められる価値について考察する。 ・旅，および旅によって発見されるものの表象の意味について考察する。	以下を学習： ・歴史の年間学習計画との関連（テーマ３「16・17世紀におけるヨーロッパの変貌と世界との関わり」）から，大発見を喚起する作品の抜粋（フィクションであるか否かに関わらず，この時代と同時代もしくは後世の物語（レシ））。 関連テクスト群の形で，旅および他所の魅惑を喚起する詩，あるいは冒険小説を学習することも可能である。

社会に生きる，社会参加する	
他者と共に：家族，友人，人間関係 ・他者との関係を表象する演劇的そして説話的なさまざまな形態を発見する。 ・テクストが表す，これらの関係の複雑さ，愛着と緊張を理解する。その論点の重要性を把握する。 ・集団の中で，あるいは集団に反して，自律性を勝ち取ることの意味およびその困難さについて考察する。	以下を学習： ・一編の17世紀の喜劇（全編を読む）。 関連テクスト群の形で，フィクションであるか否かに関わらず，幼少期，思春期を語る物語（レシ）の抜粋を学習することも可能である。 この問題提起は同じく，さまざまなメディアが発する資料および創作を研究する機会にもなりうる。
世界を見つめ，多様な世界を産み出す	
新たな宇宙を想像する ・さまざまなジャンルに属し，想像上の世界，驚異に満ちた世界，あるいはユートピアに満ちた世界の表象を提示するテクスト，イメージを発見する。 ・これら想像上の宇宙の一貫性を感じ取ることができる。 ・想像力がもつ再構成力を評価し，これらの文章・イメージが私たちの現実に対する知覚に何をもたらすかを考察する。	以下を学習： ・一編のおとぎ話（全編を読む） 同じく，ユートピア，あるいは空想科学小説の抜粋，さらに現実を詩的に再構成する関連詩篇群あるいは関連物語群の学習も可能である。 想像上の宇宙を作る静止画像あるいは映画を学習することも可能である。
世界に働きかける	
ヒーロー／ヒロインと英雄精神 ・叙事詩および小説に属し，ヒーロー／ヒロインとその活動を提示する作品・テクストを発見する。 ・ヒーロー／ヒロインならではの模範性，およびヒーロー／ヒロインの特異性，争点となる価値の集団的意義との関係を理解する ・ヒーロー／ヒロインの人物像の多様性，および人物像が掻き立てる関心の意味を考察する。	以下を学習： ・歴史の年間学習計画との関連（テーマ２「11～15世紀の西洋封建社会における社会，教会，政治権力）から，中世の作品，武勲詩あるいは騎士道小説の抜粋。 **および** ・古代から21世紀までの叙事的作品の抜粋。 ヒーロー／ヒロインの人物像が登場する漫画の抜粋，および映画もしくは映画の抜粋も利用可能である。
補足的問題提起（選択により，少なくとも1年に１つ）	
人間存在は自然の支配者か？ ・芸術史との関連から，さまざまな時代における自然の表象から着想を得たテクストとイメージをもとに，人間と自然の関係を問う。19世紀に始まり今日まで続く転換を把握する。 ・今日の人間の責任を理解し，予想する。 **自由な問題提起**	以下を学習もしくは利用可能： ・地理と歴史の年間学習計画との関連から，中世から古典主義時代に存在した，自然を統御する技術を示す写実的もしくは詩的な描写，彩色装飾，版画作品もしくは絵画作品。もしくは現実あるいは想像上の美しさを夢想する技術を証言する写実的もしくは詩的な描写，彩色装飾，版画作品もしくは絵画作品。 ・風景・ライフスタイルの推移についての，空想未来物語（レシ），写真による証言。

コレージュ第３学年	
文学上の論点と個人の形成に関わる論点	資料体（コーパス）の指示
自分を探し，自分を作る	
愛について語る ・愛の言説の多様性を表現するさまざまな時代の詩を発見する。 ・恋愛感情のニュアンス，そして恋愛感情が文学・芸術表現の主要テーマとなる理由のいくつかを理解する。 ・恋愛詩におけるイメージとイメージが指し示すものの役割を考察する。	以下を学習する： ・古代から今日に至る恋愛詩群。 17世紀の悲劇，18世紀の喜劇，あるいは19世紀の正劇を１編，これに加えて恋愛感情の分析を提示する中・短編小説，小説，映画の抜粋も学習可能。
社会に生きる，社会参加する	
個人と社会：価値の対立？ ・演劇ジャンル，小説ジャンルに属するテクストを通じ，登場人物が担う価値の対立を発見する。 ・演劇もしくは小説の筋の構造とダイナミズムは対立と深く関わっていることを理解する。そして，その対立が争点にしている利害と価値が何かを把握する。 ・争点となっている価値体系の間で妥協が可能かどうか考察する。	以下を学習： ・17世紀の悲劇もしくは悲喜劇（全編を読む），あるいは18世紀の喜劇（全編を読む） 関連テクスト群の形で，18，19，20世紀そして21世紀の小説もしくは中・短編小説の抜粋も学習可能。
世界を見つめ，多様な世界を産み出す	
現実世界を問うためのフィクション ・写実主義もしくは自然主義美学に属する説話的作品とテクストを発見する。 ・社会の表象という領域において，19世紀の写実主義もしくは自然主義小説が何を目指していたのかを理解する。 ・幻想物語がこの美学に属しつつ，いかに現実世界の地位と限界を問うているかを理解する。 ・現実の表象において，登場人物が表象される方法について，および登場人物の役割について考察する。	以下を学習： ・歴史の年間学習計画（テーマ２・３「19世紀におけるヨーロッパと世界」および「19世紀フランスにおける社会，文化，政治」）との関連から，写実主義もしくは自然主小説１編あるいはいくつかの中・短編小説。同じく，写実主義もしくは自然主義小説あるいは中・短編小説の映画もしくはテレビによる翻案に依拠することも可能である。 **および** 幻想中・短編小説（全編を読む）
世界に働きかける	
情報を与える，情報を得る，情報を歪める？ ・さまざまな媒体上で，そしてさまざまなフォーマットで報道記事，ルポルタージュ，イメージを発見する。これらは同じ出来事，もしくは共通の社会的問題，テーマに関連する。	以下を学習： ・新聞・雑誌そしてさまざまなメディア（新聞，雑誌，ラジオの録音もしくはテレビの録画，デジタルメディア）のテクストと資料。この学習は，新聞・雑誌とメディア週間と関連づけて，このイベントの事前学習あるいは事後学習の形で実施可能である。

・情報源を確認すること，突き合わせることの重要性，生の事実と情報の違い，文章を書くこと，短縮して引用すること，モンタージュすることによる効果を理解する。 ・情報の編集方法の変遷について考察する。	同じく，プロパガンダの目的で構想されたテクストや資料，あるいは情報操作を示すテクストや資料も利用可能である。 同じく，新聞・雑誌と報道業界を扱った，19, 20, 21世紀の小説，中・短編小説，映画の抜粋も学習可能である。
補足的問題提起（選択により，少なくとも1年に１つ）	
都市，あらゆる可能性が存在する場所？ ・都市をその多様性，複雑性そして矛盾において表象する作家 ―詩人，推理小説の作者，19・20世紀の主要小説家 ― および芸術家に，都市がどのようにインスピレーションを与えているかを提示する。 ・都市空間の表象の両義性について考察する：都市は逃避，自由，出会い，発見の場所であると同時に，《堕落》，孤独，幻滅，恐怖，あるいはユートピアの場所である。 ・巨大都市の発展から生じうる帰結について考察する。 **自由な問題提起。**	以下を学習もしくは利用可能： ・都市空間を対照的に表象している19世紀から今日に至る主要小説から抜粋した描写と物語。 ・都市のユニークで詩的なヴィジョンを提示するテクスト。 推理小説，空想科学小説における都市の重要性を学習することも可能である。 同じく，映画，漫画，写真集の抜粋を利用することも可能である。
コレージュ第４学年	
文学上の論点と個人の形成に関わる論点	**資料体の指示**
自分を探し，自分を作る	
自身を語る，自身を表象する ・自身について書くこと，自画像のさまざまな形を発見する。 ・自身を語る，あるいは自身を表象する企ての理由と意味を知る。 ・自身を把握し，真実を探求する努力を認識する。 ・自身に関する物語，あるいは自画像の構成の理由と効果について考察する。	以下を学習： ・自伝もしくは自伝小説に属する本を一冊（全編を読む）。 **もしくは** ・自身に関するさまざまな形式の物語，あるいは自画像と呼べる多様な世紀・ジャンルに属する作品の抜粋：エッセー，回想録，自伝，自伝小説，日記および私的書簡等。 関連テクスト群は他の芸術（絵画，写真もしくは動画 ― ヴィデオもしくは映画）における自画像もしくは自伝の重要な例を含むことができる。
社会に生きる，社会参加する	
社会の欠点を告発する ・異なる芸術・ジャンル・形式に属する風刺的狙いをもつ作品，テクスト，イメージを発見する。	以下を学習： ・古代から今日に至る，異なる文学ジャンルあるいは文学形式に属する作品，もしくはテクスト（特に風刺的な詩，小説，寓話，哲学譚もしくは滑稽譚，攻撃文章）。

・風刺の理由，狙い，様態，皮肉（アイロニー）の効果，および皮肉（アイロニー）が駆使する誇張，貶め，意味のずらしの効果を理解する。風刺の機知を評価することができる，さらにその効果と限界を把握できる。 ・風刺的喜劇の道徳的，社会的意味について考察する。	**および** ・新聞・雑誌あるいはポスター，漫画本の絵。 同じく，風刺的な狙いのある公演，ラジオもしくはテレビ番組，デジタル創作の抜粋も利用可能。
世界を見つめ，多様な世界を産み出す	
詩的な世界観 ・ロマン主義から今日に至る，主に詩に属するテクスト，作品を発見する。 ・私たちの世界存在を称賛し，増強するため，そしてその意味を問うために，詩は言語のあらゆる可能性を駆使することを理解する， ・詩的テクストの美しさへの感受性を涵養する，そして詩的テクストがそれを読むという経験によって読者が感じるよう誘う，世界との関係を考察する。	以下を学習 ・ロマン主義から今日に至る詩あるいは詩的散文からなるテクスト。世界観の多様性および，その世界観がさまざまな美学に属していることを理解する。関連テクスト群には絵画における風景画の重要な例を含むことができる。
世界に働きかける	
国家の中で行動する：個人と権力 ・さまざまなジャンルに属し，重要な歴史的大変動に関連した20世紀のテクストと作品を発見する。 ・いかなる点において，文学テクストは歴史資料という位置付けを超えるのかを理解する。また，なぜ文学テクストは歴史的証言，修辞上の効果以上のものを目指すのかを理解する。 ・社会問題への参加，レジスタンスの概念について考察する。そして学習中の作品・テクストを特徴づける歴史との関係について考察する。	以下を学習： ・歴史の年間学習計画との関連から（20世紀の学習，テーマ１「ヨーロッパ，総力戦の主戦場」），世界大戦，両大戦間の社会，ファシズム体制，全体主義体制など，20世紀の歴史を眺望する作品全体もしくは作品の大部分（全編を読む）。 さまざまな文学ジャンルに属する他の作品の抜粋，同じく絵画作品あるいは映画作品の抜粋も学習可能。
補足的問題提起（選択により，少なくとも1年に１つ）	
科学の進歩と夢 ・時に称揚，神話化され，また時に反発あるいは失望の対象となった科学の進歩について，特に19世紀における科学の進歩という考えについて考察する。 ・諸科学と文学の関係について，特に学者，天才的創造者，慈善家の人物像，あるいは有害で悪魔的な人物像が登場する作品を通じて考察する。 ・科学技術の進歩を考え，想像し，さらに予見しようとさえする芸術の野心について調べる。 **自由な問題提起。**	SF 小説，中短編小説，空想科学物語（レシ）を学習することも可能である。新聞・雑誌および諸メディアから発せられたテクストや資料（新聞あるいは雑誌の記事，ラジオあるいはテレビの録音・録画，デジタルメディア）に頼ることも可能である。

さまざまな授業との接点

生徒の一貫した養成に貢献する以下の接点は，科目間の垣根を外した各科目の取り組み，そして道徳・市民意識の養成への全ての科目の対応を支援する。

フランス語と古代語

フランス語の授業は絶えず古代語と遭遇している。古代語により，異なる文字体系と構文体系を発見できる。古代語はフランス語の歴史についての考察を引き起こす。古代語は語彙の獲得に寄与し，言葉の意味を解き明かす。古代語は文化の地平を開き，文化的知識（レフェランス）を拡大する。これらの地平，知識（レフェランス）は絶えず，文学的，芸術的，科学的創作の糧となってきた。

つまり，古代語はフランス語とロマンス諸語の授業，歴史の学習指導要領，芸術史（絵画，彫刻，建築，声楽，演劇等）と美術教育の接点に位置する。古代語は数多くの読書案内，とりわけ神話，信仰，英雄を中心とした読書案内を提供する。同じく生徒は古代の作品と近・現代の作品とのあいだの反響もしくは隔たりを吟味することができる。生徒は作品のコレクションを編み，それから発想を得て個人的にリライトし，古い神話を近代がどのように転換（演劇，映画，小説，詩等）してきたのか調べることができる。生徒はまた地域の考古学上の遺産を調査することも可能である。

フランス語と現用外国語もしくは地域語

生徒からすると，自身が学習するさまざまな言語とフランス語との比較からは学ぶところが多い。これは言語システムの一貫性，言語システムの類縁性，あるいは相違，関係についての考察を育成する。

比較は，構文および語彙上の類似点と相違点を対象としうる。比較により，異なる語族に共通する基盤を同定し，単語の意味を豊かにするために類縁性を探索し，それぞれの言語にはその言語固有の世界観があることを理解することができる。語彙の借用や他の言語への伝播のいくつかの例は，それが古いものであれ最近のものであれ，言語とは生き物であり，絶えず変異していることを生徒に示す。

それぞれの言語がどのように動詞と時制のシステムを構築し，論理関係を表現しているかを，対比的に検討することからも得るところは多い。それは，文法用語を可能な限り一致させる機会にもなるだろう。

同じく，異なる文化から生まれた文学作品を比較することもとても有益である。地域，ヨーロッパを代表する，そして世界的な文学遺産作品をフランス語で読むこと，特にフランス文学に大きな影響を残した作品を読むことは，共同作業の機会となる。また，原語による抜粋に触れ，これらの作品を生み出した文化的コンテクストを理解する機会にもなりうる。これらの作業は，同じくフランス語圏の文学を対象に行われれば，フランス語による表現には複数の形式があり，これらの形式は創造によりフランス語の実践を豊かなものにしていることを，生徒に示すことができる。

フランス語，歴史，道徳・市民教育

フランス語と歴史の共同授業や連携授業はテクストの学習と歴史上の時代の学習を年代的に一致

させることに限定されるわけではない。これらの授業は，学習期のそれぞれの学年において，読みのテーマをより細かい問題提起に落とし込むことにより可能となる。学習指導要領で教えることが義務付けられている項目以外にも，フランス語教員は歴史の学習指導要領に示されている技能（コンピテンシー）の構築にきわめて重要な貢献をする。これは特に，歴史的史料の同定と分析に該当する。

多種多様な学習活動の実施とその成果は，あらゆる時代の探検者の旅行記，東洋のおとぎ話，異文化との関係を証言するオリエント風の物語，中世社会の舞台表現，ヴェルサイユ宮殿での王の娯楽，フランス革命によってもてはやされた英雄のモデル，あるいは第二次世界大戦中に書かれた政治参加の詩などに具体的な意味を与えうる。

道徳・市民教育の学習指導要領の問いは，論証的技能（コンピテンシー）の構築に効果的なトレーニングである調査や討論の実施に適している。

フランス語と芸術

芸術史の学習指導要領は，文学，造形・視覚芸術，音楽，建築，舞台芸術，映画の間の連結点を数多く提案している。生徒は，芸術家が先行する作品や世界観を自身のものとし，その意味をずらし，あるいは変形する方法に関心を抱く。さらに，時代の証言とも言える運動・流派を芸術家が作る際の継続性・断絶・手法に，関心を抱くよう促される。同じく生徒は，今日の世界そして現代芸術に固有の引用の仕方，交配・雑種形成の形態を学ぶことも可能である。建築，都市計画，風景（現実の，また想像上の）の変遷，あるいは空間上のユートピアについて学ぶことで，地理との関連を築くことも可能である。

イメージの分析に固有の領域はいくつかの科目に分割されている。これらの科目は，資料体（コーパス）の学習・分析の際に用いる語彙の借用を互いに調整することによって得るところが大きい。

フランス語と他の知の領域

フランス語は，科学も含めた他のあらゆる科目における表現の質の向上に寄与する。フランス語教員は図書資料室と司書教諭とともに，――これからは教育のあらゆるレベルに存在する――情報を処理し，メディアについて知り，メディアを使いこなすことに欠かせない技能（コンピテンシー）の育成に留意する。